

# 巻 頭 言

## 翻訳と創造

日本知的財産翻訳協会 理事  
園田・小林知財サービス株式会社  
取締役 翻訳部長 長友 陽子



6月に当協会の理事を拝命しました。

業界で長くご活躍されてきた錚々たるメンバーに囲まれ肩身が狭く、しかも本号では新任理事として巻頭言を書かせていただくなど恐れ多いことですが、自己紹介を兼ね、この機会に翻訳という仕事と創造性について書かせていただこうと思います。

### 創造的な仕事とは

大学生活も後半に差し掛かった頃、友人たちとの間で卒業後の進路が話題に上るようになってきました。特に具体的なビジョンもなく「人に使われるだけの仕事やルーティン的な仕事はやりたくないよね」というようなことを漠然と言い合い、今考えれば何とも頼りない社会人予備軍でした。

友人の一人が「自分で何かつくりだす仕事がいい」と言ったのを受け、学部では演劇や映画を研究対象としていた私は芸術系キャリアのことを即座に思い浮かべたのですが、友人は「芸術系まで行かなくてもいいけど、創造的な仕事。例えばタクシーの運転手よりはマスコミとか」。

反射的に「そうだね」と答えたものの、少し考えて私は「だけどタクシーの運転手でも、特定の状況で特定のお客さんのためにルートを工夫したりすればそれは創造的なんじゃないの?」と答えました。私としては大真面目なコメントだったのですが、友人たちは「いやそういうことじゃなくて」と笑い話的な雰囲気になり、会話はそれっきりでした。の

んきな大学生生活を終え、友人たちが証券会社に就職、大学院に進み人形浄瑠璃の研究、結婚し専業主婦といった進路を選択するなか、私は英国の美術工芸大学に留学しました。

### 制約のない「創造」

産業革命の出発点というお国柄からか、英国の留学先では、美を機能に結びつけるデザインと、いわゆる純粹芸術たるファイン・アートとが明確に区別されていました。まずは教養課程として、美術史などの座学や、デッサン、彫刻、版画、写真、コンピュータデザインなどの実技をひとつおりました。授業は刺激に満ちていたため私は非常に熱心に勉強していましたが、留学用の英語の勉強をまったくせずに現地に乗り込んだせい、はたまた英国もヨークシャーという訛りがきつめの地域にいたせい、先生の指示がよく理解できないまま常に勝手な行動をとっていましたので、先生方は色々困惑していたかもしれません。教養課程をひとつお終えて専門科目を決める時期になり面談をしたとき、担任の先生に「君はファイン・アート（に進む）でしょ」と怖い顔で言われ面談は即座に終了しました。また、この頃から奨学金返済のため早朝に大学図書館の清掃員のアルバイトもしていましたので、ローカルの人々とも仲良くなれ、英国社会の一端を垣間見、それを当時の英国の現代美術と結びつけて考えることができたのも大きな収穫でした。石膏で

できた風船が冷蔵庫から無数に飛び出している彫刻作品を最後に、私の3年間の留学は終わりました。

帰国後はアルバイトをしつつ、大学時代からの友人が主宰する劇団での演劇活動や自身のアート活動を続けつつ数年がたちました。演劇は劇場を借り有料でお客を呼ぶのが一般的ですが、アート活動は無償であることのほうが多く、ゆえに出発点は自分、概ね帰着点も自分、すなわち自己満足の世界です。なかでも私が当時やっていたのは、絵画や彫刻のような決まった形式のないパフォーマンス・アートというものでした。自己満足を100%の純度で他人にぶつける活動を通じて学んだことは「他人が自分を、自分が意図するように受け止めてくれることは甚だ稀である」ということでした。これを新たな発見として、特に否定的になることもなく受け止めることができたのは、私の生来の性格によるものであったと思います。

## 規則と様式

少し時期が戻りますが、大学では能や狂言、歌舞伎などの日本の伝統芸能についても学びました。当時それらの舞台はたびたび観に行っていましたが、この頃私は多分に西洋かぶれしておりそこまで熱心ではありませんでした。のちにホテルのコンシェルジュになってからは、2008年に能と狂言がユネスコの無形文化遺産に指定されたことから外国客からの問い合わせも多く、これらの伝統芸能に触れる機会が増えました。能も狂言も、決まった演目において、類型化された登場人物が指定された能面や装束を身に着け特定のしぐさの組み合わせで動くことによって演じられます。自分の想いの発露が中心の「アート」は制約がないゆえの意外性や驚きが特徴であったのに対し、伝統芸能は制約内でしか見ることのできない様式の中の美でした。そしてそのような美を感じ取った自分に対して、むしろ様式を突き破って迫ってくる何かがあることに徐々に気づいていきました。制約のない「自由」なものよりも厳格な制約があるもののほうが創造的な刺激に満ちている、そう感じられたことが新鮮でした。

## 課題と創意工夫

芸術活動中の生活の糧として客室清掃の仕事をしていたホテルでは、英語が話せたことから接客部門に異動し同時に社員雇用となり、ゲストリレーションズという部署に配属されました。ゲストリレーションズは宿泊関連の通常業務に収まらない、重要顧客向けの付加的な対応やイレギュラーな対応をメインとする部署です。ほどなくして、西欧風のコンシェルジュを日本で初めて正式導入したホテルで研鑽を積んだ方が新しく入ってこられ、この大先輩がサービスを強化・洗練させるべく改革を進め、部署は正式にコンシェルジュデスクとなります。

コンシェルジュとなってからは、デスクを一人で守ることが多いなか、お客に求められたことにNoと言わずに対応していくことの難しさを実感しました。一流料亭の予約、病院への付き添い、介護施設の見学、クラシックカーの購入といった一見厄介なことにも、手持ちの手段をもとに自分で何らかの道筋をつけ対応していきます。単に困難だけではなく、自分一人ではそもそもよく分からない課題の連続でした。「コンシェルジュとは、何でも実現できる人ではなく、何についても誰に相談したらよいか知っている人だ」ということをコンシェルジュの会合などでよく耳にしました。この言葉を「無理難題は来るけれども自分はひとりではない」と解釈すれば少し肩の荷が下りますし、実務でもその通りでした。このような予測不可能な課題の解決にもまた、創造的な側面が多分にありました。

## 創造とは

翻訳という仕事は他者が書いたものを別の言語で表現しようとするものですから、根本的に創造的ではないと考えるのが普通だと思いますし、私も以前はそうのように考えていました。しかし上記で述べたような制約や課題解決との関係を踏まえますと、特定の業種や職種が創造的なのではなく、ある時間をかけて何かを実現すべく自分で考え、その思考を積み上げたものを駆使して実行に移していく、そのようなチャレンジにおいて現状からのギャップが大きいものを創造的というのかなと今は考えています。